

編集後記

私も、原稿を書くのは比較的早いほうである。そうたびたびは、出版社の編集部員を泣かせた記憶はない。そう勝手にうぬぼれているので、それこそシアワセものである。どうも、最近の傾向として、「胃と腸」の刊行が多少おくれがちなのではないか。たいへん気になることである。いつも、たいへんな力作が寄せられているので、執筆にてまどられるのは重々理解できる。この号の、私が書いたような総説のような、はいすてるほどある論文はほとんどないので、データの集計、整理に時間がかかってしまうことはわかる。しかし、もうすこし早く、手もとに雑誌がとどくよう御協力して頂けないだろうか。これは、編集部から聞いたわけではない。私が、勝手に、そう思いこんで書いているだけである。

さて、今月の特集は、いうまでもなく、消化器内科医と消化器外科医の両方が、重大な関心をもって読まれる主題である。消化器病学における内科と外科のあり方を適切に教え、考えさせてくれるテーマである。武藤教授の論文は、非観血的止血法で試行錯誤を続けているわれわれを力強く刺激してくれる。しかし、非観血的止血法は、まだまだこれからの課題で、世界的な視点でみて、とくに誇れるような、まとまった成績もまだ現れていない。何年か先にもう一度特集をやったほうがよいと思っている。しかし、読者の多くは、深い関心をもって、お読みになるだろうと期待している。

<竹本 忠良>

<編集> 早期胃癌研究会

投稿規定